

観察者のノートに子どもが描くものは？

砂上 史子

観察のなかで出会うこと

私はこれまで幼稚園や保育園での観察を継続的に行ってきました。私の観察スタイルはあるひとつのクラスに継続的に入らせていただき、子どもたちの生活のなかに参加し、観察メモをとり、そのメモを記録としてまとめ、保育者の先生にフィードバックするとい

うものです。

現在ゼミナールの学生とともに継続的に観察させていただいている保育園では、先生方のご厚意もあり実際に子どもとかかわる形で参与させてもらっています。そのなかでこれまでの観察にはなかった出来事に遭遇し、そのなかで子どもについて新たに気づくことも多くあります。ひとつが、子どもたちが私の観察

ノートに絵を描くということです。

観察者に徹する姿勢で臨んでいるとしても、子どもたちにとって観察者という存在は決して透明人間や壁のようなものではありません。子どもたちが私のノートに描いてくれる絵はそんな当たり前のことに気づかせてくれると同時に、子どもたちが心のなかで大切にしている世界の一端を教えてくれるものでもありません。

「かいて」から「かきたい」へ

私が現在観察しているクラスは四歳児のクラスです。その前年度は三歳児クラス、前々年度は二歳児のクラスを観察させてもらっており、現在のクラスの子どもたちのなかには、その子が二歳児クラスだったときに観察していた子もいます。

二歳児クラスの観察しているときから、子どもたちは私のノートに興味津々でした。観察者としては当然

り前と思っけていても、子どもたちからすれば自分たちのそばでせつせと何か書いている大人の存在はやはり気になるものなのでしょう。子どもたちはよく「何かいてるの」「みせてー」と声をかけてきました。走り書きの文字や図ばかりのノートを見て不思議そうな表情を浮かべたり、「これ〇〇ちゃんの名前だよ」と教えると少し嬉しそうな表情をしたりしていました。

二歳児、三歳児クラスの観察のときには、「アンパンマンかいてー」などと観察者に何かを描いてほしいことがほとんどで、自分で描きたがることの少なかった子どもたちですが、四歳児クラスになるとそれが大きく変化し、観察者のノートに自分自身で絵を描きたいというようになりました。「かいて」から「かきたい」という変化に、幼児期の子どもの「表現する主体」としての育ちを感じるとともに、そこで描かれる絵や文字に子どもたちの願いや思いが込められているようにも感じます。

子どもは観察者のノートに

何を描いているのか

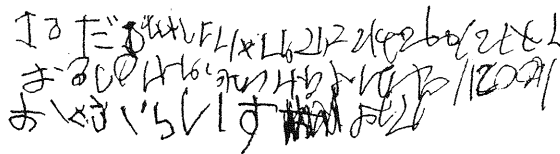
では、子どもたちは観察者のノートに何を描いているのでしょうか。

私の観察ノートの子どもたちが絵などを描き始めたきっかけの一つは、Aちゃんのレストランごっこでした。AちゃんとBちゃんが私のノートをいたずらっぽく持つていつていろいろと落書きをしているうちに、Aちゃんが「ご注文は？」と言ってレストランごっこが始まりました。私が「じゃあ、プリンください」「サラダください」とお客さんとして応えると、Aちゃんはウエイトレスが注文を伝票に書くふりしをしました。このとき「まだ、『お』と『よ』とくしか書けない」と言うAちゃんに対して、私が「うそこの字でいいよ」と言うと、Aちゃんが文字を書くふりを続けたことが印象的でした。そのときAちゃんがノート

に書いたものが図1です。「さ
らだ」「おむらいす」などA
ちゃんなりに一生懸命に書いた
様子がうかがえます。

正確な文字ではない字もあり
ますが、四歳から五歳にかけて
の時期の子どもにとつて文字を
書く（ふりをする）ことへの興
味や意欲が、ひしひしと感じら
れます。この観察の次の観察
（二週間後）でも、Aちゃんは
またレストランごっこをして、
観察者のノートに同じように注
文を一生懸命に書きました。

Aちゃんが観察者のノートに書いているのを見て刺
激されたのか、他の子たちも「かきたい、かきたい」

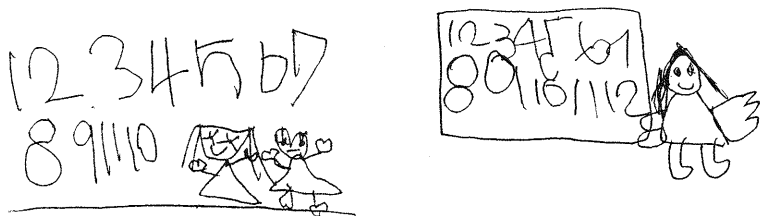


▲図1 4月24日 注文メモ (Aちゃん)

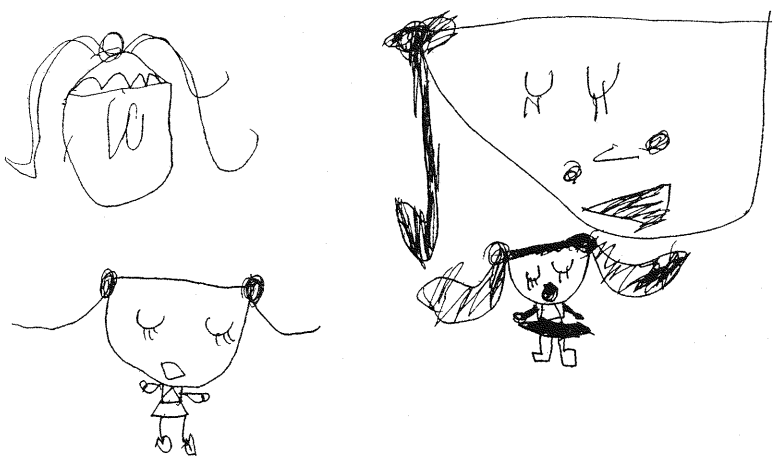
とやってくるようになりました。

最初は遠慮もあつてかノートの隅っこに小さく描いていたのですが、少しずつノートの一頁をまるまるつかつて絵を描くようになりました。「かきたい」とやってくるのは女の子が多く、メンバーもほぼ決まっているせいか、その子たちの描く絵と絵の関係や、その変化が面白く感じられるようにもなりました。

例えば、いつも絵を描く「常連さん」の女の子たちは、お互いによく似た絵を描くことがあります。ノートが小さいため同時に描いているのではなく一人ずつ順番に描き、何を描くかはそれぞれの



▲図2 5月29日 数字と女の子（Cちゃん：左，Dちゃん：右）

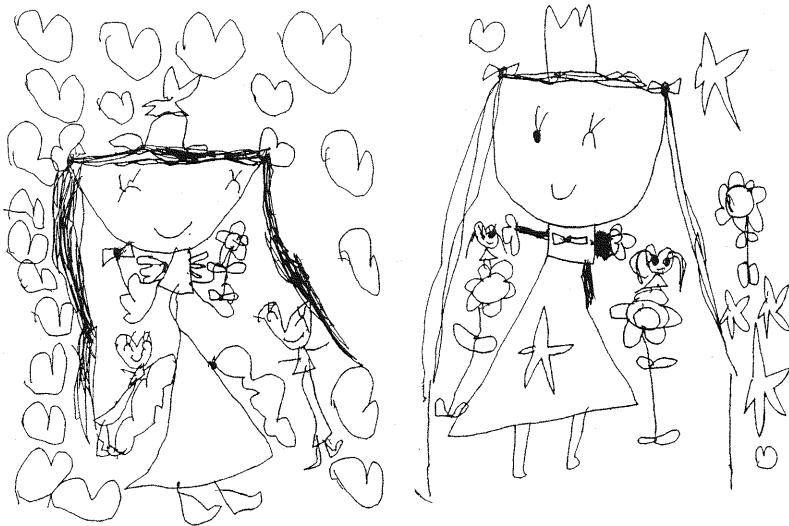


▲図3 8月21日 目を閉じている女の子（Aちゃん：左，Eちゃん：右）

子が自由に決めていますが、同じ日に描かれた絵のなかに似ている絵を見つけたことは少なくありません（図2、3）。

このようにお互いの絵に影響され合う形で子どもたちは絵を描いています。自分の描きたいものを描く過程で、他者の絵をひとつの参照枠としたり、他者の工夫を自分の絵に取り入れたりしていると言えます。また、「常連さん」の女の子たちは、私の観察のなかでは一緒に遊んでいることが多く、おそらくそうした人間関係も影響しているでしょう。

そのようにして、他の子に影響されるなかで、特にCちゃん、Dちゃん、Fちゃんたちはいつもドレスを着た女の子のお姫様を描くことが多いのですが、その描き方に一つの流行のようなものが自然と生じてくるようになりました。お姫様の絵は、短い期間のなかでスカートの丈や髪型、王冠、周囲の星などディテールが工夫され変化していきました。例えば、お姫様の周



▲図4 9月4日 ハートと星に囲まれたお姫様（Cちゃん：左、Dちゃん：右）

囲に星などが描き込まれたり、スカートの丈が長くなったり、髪型がまっすぐから外側に向かってはねたりするように変化したりしました(図4、5)。このことは、Cちゃんたちがお姫様の絵を描くことに並々ならぬ関心とエネルギーを注いでいること示しているとも言えます。

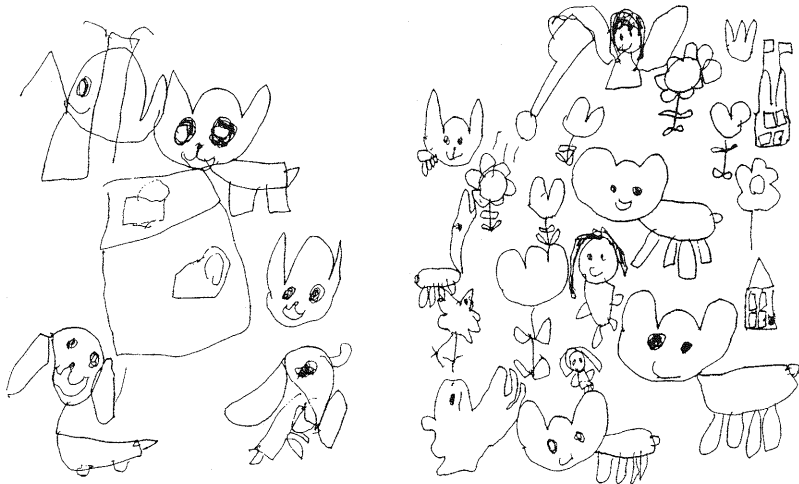
筆者自身の四〜六歳の頃を思い出してみると、ほとんど毎日のように同じようにきれいに着飾った女の子やお姫様の絵を何枚も何枚も毎日毎日描いていました。風になびくフリルの動きや髪に結んだりポンを立体的に見せるために、さまざまな描き方を子どもなりに工夫していたように思います。あの集中力とエネルギーはいったい何だったのかと自分でも不思議になるくらいです。すべての子がそうだというわけではありませんが、繰り返し自発的に描かれるテーマが子どもにとって意味のあるものであるならば、幼児期に一部の子どもたちが描くお姫様の絵には、単なる絵のテ-



▲図5 10月2日 スカートの長いお姫様 (Cちゃん：左、Dちゃん：右)

マとしてだけでは無い願望のようなものが込められているように感じます。花や星やお月さまなどありとあらゆるきらきらしたはなやかなアイテムに囲まれて、にっこりと笑っているお姫様の姿はこの時期の子どもが夢見るひとつの「憧れ」や「幸せ」の姿なのかもしれません。

もちろん、すべての子が他の子に影響されたり、お姫様の絵を描いたりするわけではありません。「わが道を行く」タイプの子もいます。例えば、Gちゃんは、他の子たちがお姫様の絵を描いているなかでも、ほぼ一貫して主に犬のキャラクターをノートに描いています(図6)。一匹だけ描くのではなく、一ページに何匹も描くところがGちゃんの特徴です。十月十六日の絵ではキャラクターだけでなくお花や女の子なども描き、ひとつの世界がそこにはあるようです。絵もだんだんと細部まで描かれるようになり、Gちゃんの



▲図6 8月21日(左)10月16日(右)犬とおうち(Gちゃん)

こだわariを感じさせます。

Gちゃんの絵を周囲で見ている子どもたちから、「かわいい」と言われることもあり、Gちゃんは、ほぼ毎回こうしたキャラクターをノートに描きます。このように、自分の描きたいと思うものがはつきりと持続しているのは、幼児期後半のこの時期に「自分の世界」が形成されてきていることを感じさせるものでもあります。

描いているときのやりとり

私のノートに絵を描くとき。前述したように、ノートは小さくペンも一本しかないので（皆、私が使っている黒いペンで描きたがります）、一人ずつ順番に絵を描いていくこととなります。みんなそれぞれに思い入れのあるキャラクターなどを描くので、一人が描く時間はそれほど短いわけではありません。順番を待っている子にしてみればじれったい気持ちにもなりま

す。絵を描きたいという子が四人も五人もいる場合には後ろの順番になった子はかなりの時間待つこととなります。そのため順番を待っている子が描いている子を急かしたり、不満をもらすこともあるのですが、それでも大きなトラブルになることなく誰かが順番を譲ったり、最後まで待っていたりする姿に、子どものひとつの育ちを感じます。

また、一人に一枚ずつ紙があつて、自分の筆記用具で描くことに比べると時間的にも物理的にも「不自由」と思われる観察者のノートに絵を描くことを子どもたちが好むのか、不思議な気持ちにもなります。そうした若干の不自由さがかえって、そこに絵を描きたいという気持ちをかきたてるのでしょうか。あるいは、観察者（大人）が使っているノートとペンを使って描くことに意味があるのでしょうか。

十二月の下旬の観察日は、「クリスマスとお正月を

迎える会」の日でした。その日は子どもたちが保護者の前でダンスや体操を発表することになっていました。保育室に入ると、そこにははなやかな衣装を着た子どもたちいました。「お花のプリンセス」を踊るという女の子たちは私のノートに絵を描く「常連さん」の子が多かったのですが、まさに私のノートに描いていたお姫様が抜け出てきたかのようでした。みんな私を見るとにっこり笑って自分が着ているドレスや髪飾りなどを嬉しそうに見せてくれました。

その日も発表の出番を待つ子どもたちは私のノートに何か描きたいと言いました。出番を待っていることもあり、「今日は（お絵かきは）お休みにしようか」と言うと、子どもたちは「描く」ふりだけと言って、私の膝の上でノートにペンを走らせるふりをして満足していました。それが一人だけでなく五人も六人も順番に並んで待っている姿を見て、「やっぱり不思議だなあ」「観察者のノートの何がそれほどまでに惹

きつけるのだろうか」と改めて感じました。

子どもたちの生活のなかで絵や文字を描く機会やそのための道具は珍しいものではありません。しかし、なぜこれほど子どもたちが「観察者のノート」に描きたいと思うのか、そしてこれからどんな絵や文字を描いてくれるのか、そんなことを考えつつ、楽しみにしつつまた子どもたちのいる場所へ赴いていきたいと考えています。

（弘前大学）

※この原稿を執筆するにあたりまして、継続的に観察させていただいている財団法人鳴海研究所清明会みどり保育園の先生方、園児の皆様にご心からお礼申し上げます。